

わら屋はわらを売っていたようですが、よくわからない、とのことでした。奥多摩街道ができた時に敷地が分かれてしまい、戦後、道路の反対側で八百屋（八百富）をやっていたそうです。

齋藤雑貨店（さかえや。現在のさかえエネルギー）は多摩製糸の向かい側ありました。のちに奥多摩街道ができ、片倉製糸（昭和14年、姉妹工場である多摩製糸を完全合併）が敷地を拡張するので現在の位置に移転したそうです。

ところで、鍋ヶ谷戸と熊牛の境ですが、お話によると吉沢自転車や西村酒店は牛浜分、千歳屋は熊川分だったそうです。



93 製米所 熊川 昭和2年
児島米店 『写真でたどる福生の100年』より

福生院の向かい側に森田薪炭店がありました。ここはたばこも売っていたそうです。そこから熊川神社にかけてたくさんのお店がありました。齋藤フリキ店にはポストがあり、切手やハガキも売っていました。女工さんたちが故郷への便りを出すためによく利用したそうです。

齋藤いちごは駄菓子屋でおでんなども販売していました。時期になるといちごを販売していたのでこう呼ばれていたようです。

肉文はいっぱい飲み屋で、十一円はちよっと高級な飲み屋でした。十一円には若い女性が五、六人いたとのこと。また、熊川神社の向かい側には山のバーという飲み屋がありました。どちらも繁盛したようです。肉文はその後、奥多摩街道寄りに移転したそうです。

鍋ヶ谷戸に過ぎたるもの三つあり
十一円の近くに火の見やぐらがありました。鉄塔でできた立派なもので近隣でも有名なものでした。その下は消防ポンプ車の格納庫になっていました。近在ではまだ手押し搬送ポンプしかない時代に、外国製のポンプ自動車をいち早く導入したことは、熊川の誇りだったそうです。

鍋ヶ谷戸に過ぎたるもの三つあ

り、火の見、会館、寺の屋根……と言われていました。「会館」は熊川神社にあった青年会館で、このような建物を持っているところはありませんでした。また「寺の屋根」とは福生院の銅板葺きの赤い屋根で、これも立派なものでした。

3ページの図面にはありませんが、山のバーのはず向かいにウサギを買い取り、毛皮を軍に納めていた

鍋ヶ谷戸と内出の境は森田八百屋
内出へ移りましょう。鍋ヶ谷戸と内出の境は森田八百屋（八百みーちゃん）とのこと。宮崎下駄屋を入ったところに澤井砂利屋がありました。馬を飼っていて砂利運搬に関わっていました。油屋（篠田）は食用油を扱っていたそうです。角六団子屋は前号の昭盛館の時にもふれました。現在は和菓子森六として杉の子第三保育園近くで営業しています。

内出商店についてはこの場所にあったのかも含め、よくわかりませんでした。

南の商店

石川酒造の近くに平井酒店がありました。文書（もんじょ）にも酒屋のようなものやっていたと書いてあるそうです。酒屋とは言

ところがあつたようです。ウサギを軍兎（ぐんと）と言ったそうです。皆さんのお話では家庭でウサギを飼っていて、大きく育ててそれを売ったり、肉を食したりしたということでした。

青鹿駄菓子屋は呉服も扱っており、後に青鹿呉服店として福生の志茂に移転しています。

わず、飲ませるようなところのようです。竹田精米は竹田米店のご先祖が今の睦橋付近で精米をしていたとのことでした。

参考文献『福生市史 下巻』

※昭和初期の熊川の商店の様子を皆さんと振り返ってみました。年代を特定できないので、不確かな部分もありますがお許しください。当時は多摩製糸（片倉製糸）の従業員も多く、商店は大変な賑わいを見せていたようです。

以前、白梅の利用者さんに「日常の買い物はどこに行くの？」と聞いたことがあります。拝島を越えて昭島のスーパーという答えが返ってきました。ちよっと残念ですが、熊川にはお店があまりないのも現実です。

※間違いやお気づきの点などありましたら白梅分館にご連絡ください。また昔の商店についてご存知の方はお知らせください。